

氏名（本籍） 中辻 小百合（東京都）  
学位の種類 博士（音楽）  
学位記番号 甲第8号  
学位授与年月日 平成26年3月19日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項  
学位論文題目 湯浅譲二の創作における声の新しい役割と可能性  
一言語コミュニケーションを主題化した作品群の分析研究一

学位論文等審査委員

（総合審査）	委員長	教授	吉成 順
		教授	久保田 慶一
		教授	塩原 麻里
		教授	山口 博史
		教授	横井 雅子
（作品演奏審査）	委員長	教授	吉成 順
		教授	森垣 桂一
		教授	山口 博史
		小鍛冶 邦隆	（東京芸術大学音楽学部作曲科教授）
（論文審査）	委員長	教授	吉成 順
		教授	久保田 慶一
		教授	塩原 麻里
		教授	横井 雅子
		水野 みか子	（名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科教授）

---

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は、申請者 中辻小百合（博士後期課程創作研究領域）の学位審査修了作品演奏会ならびに学位申請論文に関して厳正な審査を行った。以下に、1. 演奏審査、2. 論文審査、3. 総合審査に関する所見を記す。

1. 演奏審査

修了作品演奏会では、《男女のうた一声のためのエチュード第2番一》が演奏された。ソプラノ、バリトンとピアノのための作品で、博士論文『湯浅譲二の創作における声の新しい役割と可能性一言語コミュニケーションを主題化した作品群の分析研究一』と関連付けて、「言語コミュニケーションに関わる声の作品のさらなる可能性を探る」という視点から書かれたものである。論文の研究対象となった湯浅作品には見られなかった男女の「対話」に着目し、様々な語学教科書を参考にしつつ独自に作成されたテキストが用いられている。

博士論文では、湯浅の「言語コミュニケーションに関わる作品」の特徴として、言語を「パラ言語的要素」「感情表出」「空間と距離」「ジェスチャー」「ジェンダー」といった「言語の問題に関わる諸要素」の観点から整理し作曲に取り入れた、ということが指摘されているが、今回の作品ではその方法を申請者なりに消化し、パラ言語的要素や音声上の特徴以外の要素など

新しい要素が独自に設定されて用いられている。

そうした意図は作品からも充分聞き取ることができ、独自に設定した「言語に関わる要素」にみられる工夫や可能性、またそれがしっかりと作品に定着していること、などが審査委員からも評価された。

ただ、対話の抽象化や異化(Verfremdung)のやり方がやや不十分な場合、一般的な「物語り」に転化してしまいかねないという危惧をはらんでいることや、「音響空間」としてのさらなる発展の可能性、ピアノのさらに有効な活用といった課題も指摘された。

とはいえ、聴き手の想像力をこぼむ新たな表現の試みや高水準の音の扱いなど、作品としての完成度は高く、審査委員会はこの作品を、創作研究領域の作品として合格に値すると判定した。

## 2. 論文審査

学位申請論文は、湯浅譲二による「言語コミュニケーションの問題に関わる声の作品」について、その独自性と 20 世紀後半における声の作品の中での価値を探るものである。第二次大戦後の現代音楽シーンでは、人間の声の持つ新しい可能性に作曲家の関心が向けられるようになり、シュトックハウゼンやベリオ、武満らによってさまざまな試みが行われたが、湯浅はそれらとは異なる切り口からのアプローチを行った。その独自性を明らかにし、詳細な分析によって確認するのが本論文の主眼である。

論文ではまず、欧米の作曲家たちの作品を中心に戦後の「声の可能性を追求した作品」の傾向を分析し、先行研究を参考にしながら湯浅作品の独自性を探る。欧米作品の多くではテキストの意味を剥奪して声の響きをどのように認識させるか、という点が追求されていたのに際し、湯浅作品では声を出すという行為そのものに重きが置かれ、音楽におけるコミュニケーションを自明のものとしてせず、言語コミュニケーションそのものに対してメタレベルからの問いかけなされているところに特徴があった。

その上で、湯浅の声を出した作品の中からとくに言語コミュニケーションに関わる作品を 4 点(《ヴォイセス・カミング》1969、混声合唱組曲《問い》1971、《演奏詩・呼びかわし》1973、《天気予報所見》1983) 選び、どのような問題意識が反映しているのかを分析的に明らかにした。そのさいの着眼点となったのが「パラ言語的要素」「感情表出」「空間と距離」「ジェスチャー」「ジェンダー」といった「言語の問題に関わる諸要素」である。

その結果、声を出すという行為自体に焦点を当て、言語コミュニケーションをメタ的視点から捉えなおして、言語コミュニケーションに含まれる全ての側面を音楽作品として再構成し、声の新しい役割と可能性を引き出したという点に湯浅作品の芸術的価値があるということが明らかになった。

論文の問題意識は明確で、とくに分析の詳細さ、緻密さは審査委員から高い評価を受けた。用語の整理や曖昧さや、論の進め方といった点で難点も指摘されたが、湯浅作品の独自性を明らかにしながら声を使った作品創作の新しい可能性を追求したことは有意義であり、審査委員会は、申請論文が創作領域の学位論文として合格であると判定した。

## 3. 総合審査

総合審査では、作品演奏審査と論文審査の評価を確認したうえで、申請者の大学院博士課程在学時の活動や学外での業績、これまでに発表された作品の評価なども考慮して、総合的な審査を行った。その結果、申請者が「高度な創作能力を身につけ、自己の創作理論を構築、展開

して、「国際的に活躍できる作家」として、将来も活動していくことが十分に期待できることから、「博士（音楽） Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに相応しいものと判定する。